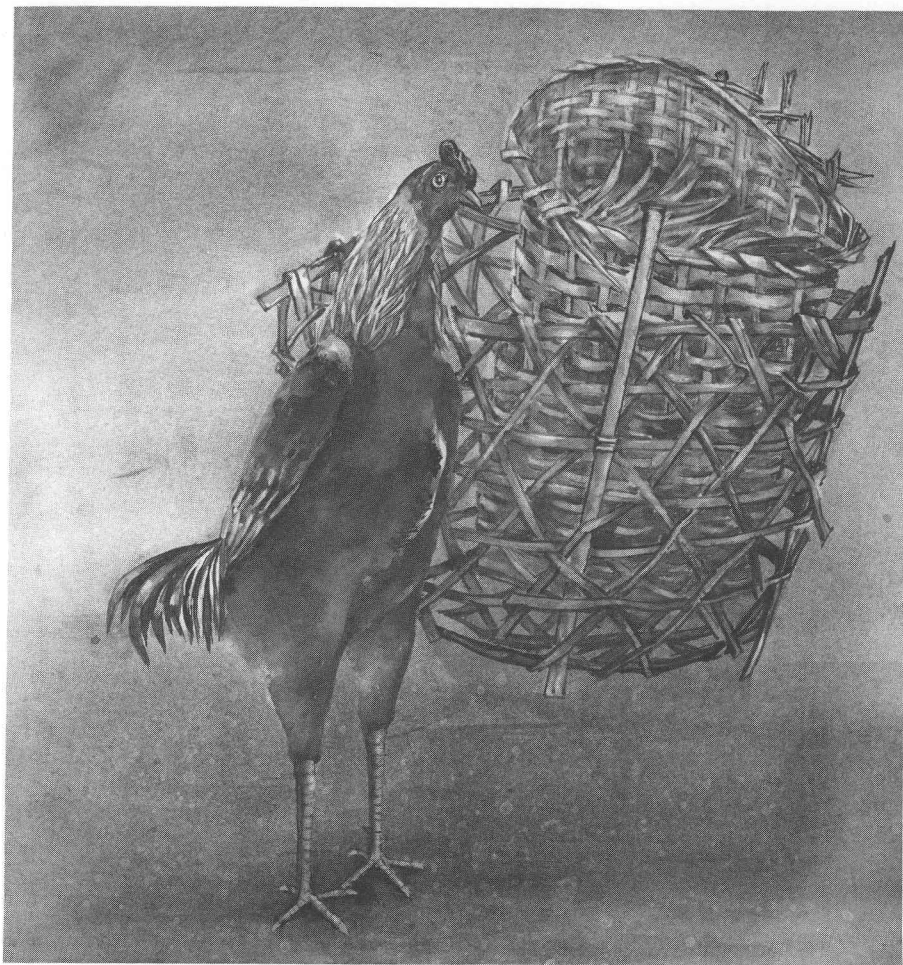


季刊 連句 第43号

平成五年十二月一日発行



三つの全国連句大会（南柏雜記41）	1
半歌仙「初昔」の巻異論（Ⅲ）	東 明雅 … 2
「灰汁桶の」の巻 鑑賞（Ⅴ）	東 明雅 … 6

第十四回 俳諧芭蕉忌 第四十七回猫養会	10
---------------------	----

正式俳諧興行 脇起り二十韻	文 中川 凡
二十韻十一巻	捌 東 明雅 梅田利子 加藤道子 神谷安子
	小林千雪 篠原達子 下鉢清子 須田智恵
	高瀬美保 橘 文子 百武冬乃

「馬追」付勝練習二十韻	16
-------------	----

第五回全国連句新庄大会	文・東 明雅 … 18
-------------	-------------

作品 五巻	捌 秋元正江 上月淳子 式田和子
	下鉢清子 東 郁子

芦丈翁俳諧聞書（Ⅸ）	20
------------	----

歌仙 三巻	捌 坂本孝子 式田和子 … 24
-------	------------------

文音	米谷貞子 山口みづゑ 上月淳子
----	-----------------

膝送り百韻 一巻	花の会 … 26
----------	----------

連句のリズム	竹本義人 … 28
--------	-----------

新刊紹介	25
------	----

雁帛往来	29
------	----

## 三つの全国連句大会

### 南柏雑記 41

雅

今年は連句人にとっては忙しい年であった。まず、平成五年七月三日、これは「いなみ」の日ということで、全国連句いなみ大会が、富山県井波町の主催で開催された。史蹟めぐり、連句実作会・表彰式・記念講演に、全国から百五十余名が浪化上人ゆかりの名刹、瑞泉寺に集った。国民文化祭以外に地方自治団体が主催して全国大会をひらくのは、山形県の新庄市に続いて二番目であり、会の運営その他にも新庄にならうところが多かったようであるが、たとえば募吟の形式を歌仙に決めるなど、思い切った改革もあり、関係の方の見識と熱意がこの会を成功させたものであろう。募吟を歌仙にしたことには、大賛成であるが、実際、蓋を明けてみると全国からの応募は二百三十巻に達し、選者は苦勞であった。これは審査の期間をもうすこし長くするとかして改めらるべきだろう。

次に九月三日・四日は、例年の通り新庄市において、全国連句大会が挙行された。この会は平成元年、「おくのほそ道」三〇〇年を期して、はじめて地方自治団体の主催で行なわれた。今回は五回目にあたるということで、連続五回出席者に対する表彰が行なわれたが、この会が連句界に与えた影響と効果の大きさを考える時、むしろ、表彰さるべ

きは連句再興の火をともされた新庄市と関係の方々ではないだろうか。この点、連句協会の方に、真剣に考えていたいただきたいところである。三日午後一時から前俳人協会理事長草間時彦氏の講演のあと表彰式、そして翌四日は九時半より十二時半まで連句実作。みよりの多い大会であった。さらに、十月三十日・三十一日は「とよた連句恋々まつり」に参加した。

この会の中心はやはり「ころも連句会」、就中、矢崎藍さんで、彼女が昨年出版した「連句恋々」に因んだネーミングである。三十日午後二時から基調講演「芭蕉の恋句」のあと、矢崎さんと西尾在住の画家斎藤吾朗さんのトーク「付けましょまつり」は新聞に応募した付句を軽妙な味で発表してパフォマンス満点、会場を埋めた三百余名の聴衆を大いに湧かせた。サブ会場では、式田和子さん捌きの笠着連句が、楽しく進行。さらに近松寿子・宮下太郎両氏捌きの歌仙も首尾、連句パーティーでは、「連句のすゝめ」の歌が披露され、やんやの喝采を浴びた。第二日は二十一席に分れて連句実作。ともかく、若い人が会場に溢れ、従来の連句大会に見られぬ活気と明るさと楽しさにみちた会であった。こんなところに連句の未来はかかっているかも知れない。

このように大会が増えると、その大会同士での期日の調整が、今後は必要になるかもしれない。

# 半歌仙「初昔」の卷異論(Ⅲ)

東 明 雅

今回はこの作品の付けの手法について考察してみよう。

まず、付けとは何か、Aという句に、Bという句を付け、この二つのA・Bの中に、Aでもなく、Bでもなく、新しい一つの詩の世界である、Bを作る。次はBに、Cという句を付けて、Bでもなく、Cでもない、そしてBとはがらりと違ったCという詩の世界を作る。それが連句の付けというものである。たとえば、

a おもひ切たる死ぐるひ見よ

b 青天に有明月の朝ぼらけ

c 湖水の秋の比良のはつ霜

(「鷲の羽も」の卷)

a は自の句で、決死の覚悟を述べたまでであり、bは場の句で青天の有明月を描いているまでであるが、このaと

bとを合わせると味爽の秋気の下、まさに敵陣に朝駈けしようとする勇士の俤がありありと浮かび上がる。これが、b

である。さらにbにcを付けると、もはやここで戦場のイメージ、bはなくなり、広々とした琵琶湖の初霜に被われた

大景に、息をのむような気分になるであろう、これがcの新しい詩の世界である。このようにして付けは進行する。これが連句の最大の文芸性である。そして、そのためには、

aはa、bはb、cはcと、それぞれの一句が独自のはっきりした世界と気分をもっていることが必要である。連句

の付けは、映画のモンタージュの手法と同一だと言われるが、モンタージュとは、別々に撮影した二つのカットを衝き合わせ、一つの新しい世界を作り出す手法である。この場合、一枚一枚のカットがおぼろげで、何を撮っているのか分からぬようであっては、それを二枚衝き合わせても、真に新しいものが生まれ出る可能性はないであろう。それと同じで、付けの条件として、まず、前句も付句もそれぞれが端的な表現で、力強くその内容を押し出していなければならぬのである。

ところで、この「初昔」の卷、今回はウラ七句目から十句目までを取り上げて検討することにしよう。

a ふとところに骰子入れて月の山

b 姫の素足の草の露踏む

c きぬぎぬを Silk Silk と訳し棄て

d 水よりあげて公魚の照り

陸 隆 實

このaとbとを付け合わせて、どのような新しい詩の世界を創り出すことができているだろうか。aは、まさか国定忠治の赤城山ではないが、このような事をするのはどういふ人物か、どうもはっきりしない、曖昧である。それはこの一句の中に、ふところとか骰子とか月の山とか、それぞれ印象の強い言葉が三つも混在し、一句としての共通なイメージを醸し出すことができないからである。

それに対してbの句は、おそらく、このあたりが恋の座であると考え、姫の美しい露を踏む足考えたものである。前句のaは一句としては「月の山」という雅なものよりも、「ふところ」・「骰子」という俗なものイメージが強いので、前句と全く対蹠的な美しいもの、あえかなるもののイメージで付けようとしたのが、このbであった。この前句と全く違った事物・雰囲気・イメージで付けて行く手法、これは凡そ二十年前、信大連句会の連衆の一人であった。詩人故高橋玄一郎氏が考案され、矛盾付と名づけられたものである。

(高橋玄一郎全集 第一巻 落落抄 七八頁参照)

フランス菓子にききしリキュール 玄一郎

肉を挽く肉屋よ月のムンク展

静生

独房にきく蟋蟀の雨

玄一郎

青き踏むシンナー遊びに魅せられて

真彦

水族館の人魚長生き

實

せんべいの塩味のり味カレー味

節子

たとえば、この作品の一句一句について、その付心を説明することは難しい、要するに前句と全く異ったもの、なるべく離れたものを付けるのであるが、この非連続の連続には、否定できない存在感、一種のおもしろさが存在することも事実である。この矛盾付の手法は玄一郎氏のみに限らず、近現代詩人の作詩の手法の一つではなかったか。

そう言えば、私はここで西脇順三郎氏の説を思い出す。

(「はせをの芸術」芭蕉の本 4 四八頁)

「二つの相反するものの融合」ということを、ゾルガーというドイツの美学者もボードレールもイロニー(「奇遇」とでも訳してみてもよいと思う)といっている。そうしたイロニーがなければ芸術が存在しないと彼らは思っている。それは超自然の存在であり、論理の世界を超越して、矛盾が矛盾でなくなることを意味する。芭蕉の「俳」はこの「イロニー」にあたるものである。『西脇順三郎がここで芭蕉の「俳」と述べているのは、芭蕉の俳句(発句)についてのみであり、俳諧(連句)について述べたのではないことに注目すべきである。

なるほど、俳句(発句)は、矛盾付の理論で片づけることはできるだろうし、矛盾付の手法で創作することも可能である。しかし、俳諧(連句)は西洋の文芸には見られない、三句の転じというものが入っている。西脇氏が、その点に気づかなかったのは、あるいは当然だったかも知れないけれども、その見落しが、実は最も重大な問題なのである。ところで、また「初昔」の巻に戻ると、

b 姫の素足の草の露踏む 隆

c きぬぎぬをSILK SILKと訳し棄て 睦郎

このbとcとはどのような新しいcが生まれてくるであろうか。cの作者は次のように発言している。

前の句の八姫の素足の草の露踏むVで王朝ふうに雅やかにになったので、それを何とか壊さねばと思ひまして。

このお姫さんは虫めづる姫君のたぐいで、つまり課題で

「きぬぎぬ」というのが出たら、それを「Silk Silk」とやってのけるくらいの闊達なお嬢さんというふうにして見たのです。

ここで、この一座の連衆の手法は、紛れもなく玄一郎氏から流れ出た、いわゆる矛盾付けであることが判然とする。これは前にも言った通り、玄一郎氏だけでなく、詩人・俳人（俳句の作者）に共通する普遍的手法であり、その人々が、詩や俳句を作っている限りは、最も有効であろうが、連句では、この矛盾付だけで押し通すことは不可能であり、失敗の原因となるのである。

それは、連句というものは前句と付句のみでなく、常に打越を意識し、むしろ、まる反対であるべきは、打越と付句との関係だからである。このbとcとで、王朝ふうの雅やかさからは脱却したcが誕生したのであるが、さて、打越の「ふところ」に骰子入れて月の山」とくらべてみるといかがであろうか。

この句の作者が前句の王朝風の雅やかさを脱れようとしたことが、打越の「ふところ」・「骰子」の境地と極めて近いものになったことは否定できない。

きぬぎぬをSilk Silkと訳するようなお嬢さんならば、ふところに骰子を入れて月の山を散歩するようなこともし兼ねまい。どちらも、自の句になっているから一層始末がわるく、見様によっては、完全に輪廻となるであろう。

私はこの一連を見ると、どうしても貞享五年九月、深川芭蕉庵で作られた「雁がねも」の巻の一連を思い出さずに

は居られない。

此里に古き玄蕃の名を伝へ

足駄はかせぬ雨のあけぼの

きぬぎぬのあまりかぼそくあてやかに

芭蕉

「初昔」の巻のb「姫の素足」が、この「足駄はかせぬ」からの連想であり、その次に「きぬぎぬを」が登場するのも、この「雁がねも」の巻の恋句があまりに優れているから、その「もどき」(擬)、あるいは「もじり」(振)であることは明らかである。

誤解をさけるために一言しておくが、私は決して、「もどき」(擬)や「もじり」(振)が悪いと言っているわけではない。すでに拙著「連句入門」(中公新書)一〇二頁にくわしく述べている通り、俳諧そのものが、いわば「もどき」(擬)に外ならないと考えているからである。「もどき」(擬)・「もじり」(振)をすることは、いわば俳諧の本質であるから、それは決して咎むべきではないけれども、「もどき」(擬)や「もじり」(振)をやる場合にも、その句が内容の変化によって、打越と障らないか、輪廻にならないかを十分検討する必要がある。

それにしても、この「雁がねも」の巻の見事さはどうであろう。玄蕃という王朝のころの職名は人名として残り、名字帯刀御免の名主・郷土の家柄である。その家の格式に恐れて、百姓たちは雨の降る朝でも、足駄を穿いて出入する者はないという意味で、前句と付句とによって、玄蕃というものの、その郷における権力のさまがはっきり描き出

されている。それは玄蕃といういかにも名門らしい厳めしいひびきが、足駄はかせぬというきびしさに、よく位が合っているために、はっきりした玄蕃のイメージが浮かび上がった為であろう。

その次の付合、これはあまりに有名な芭蕉の恋句であるが、それだけのすばらしさを持っている。前句を足駄をはくことをためらっている男性と見て、付句はあまりにもかぼそく、あてやかな女君を向付にしたもので、両句相俟って纏綿の情尽きがたい艶麗な場面を作り出している。これは前句の「雨のあけぼの」という語のもつなまめかしさを手がかりに、後朝の恋に舞台を転じたもので、いわゆる「うつり」の付けであろう。

このように芭蕉の付句は「位」とか「うつり」とか、あるいは「におい」とか、いわゆる余情付であり、疎句（前句と付句が離れているもの）も多いけれども、親句（前句と付句が近いもの）も結構交じっている。このように親句と疎句が入りまじっていることが一巻の調子を豊かにするもので、矛盾付け（疎句）一本やりの作品は、勢い単調になつて行くのは当然であろう。

さらに「初昔」の巻の残つたもう一句を点検してみよう。

c きぬぎぬを Silk Silk と訳し棄て

睦郎

d 水よりあげて公魚の照り

實

d の作者小沢實氏は「シルクの艶に合うように考えてみました」と言っている。この句は矛盾付ではなく、芭蕉俳諧の余情付、「うつり」とか「におい」とか呼ばれる付け方

であろう。艶なるものの照合という点では成功している。これが、この二句だけで終る作品ならば、それでもよいだろう。しかしながら、俳諧（連句）の中では、この句も全く打越を考えていない。打越の

姫の素足の草の露踏む

これこそ、まさに艶なるものであり、きらきらした草の露をふむ姫の素足の艶麗さは、まさに水からあげられた公魚の肌の輝きと等質のものではなかったか。ここにも三句の転じが忘れられている。

以上、私は「初昔」の巻から四句だけを取り出して、その付けの特色と欠点とを指摘した。残つた十四句についても大体、同じ調子である。

結論として、この作品に用いられたのは、詩や俳句に常用される、いわゆる矛盾付であり、それは作者が詩人・俳人であるこの作品に取つては当然のことかも知れないけれども、俳諧（連句）では、三句の転じというものが一番大切であるから、前句のみを考えて、その反対を付けて行く手法では不十分であり、この作品の場合は大むね失敗と言わざるを得ない。しかも、句によっては、五・七・五、十七文字の中に、発句（俳句）的な二章体の句を含んでいることも、反省の材料であろう。

詩人・俳人で、近ごろ連句に興味を持つ人が多くなつたのは結構である。しかし、連句をやるからには、連句の文学性、その特質に思いを致し、十分にその独自の手法を学んで欲しいと思うものである。

# 「灰汁桶の」の巻鑑賞 (V)

東 明 雅

(承前) 私はその遊女屋の性格を強調しすぎると、また恋句になりにかねないと考えていたが、この句自体としては、そのような点は抑制され、ただ、熱い風呂そのものを堪能しているのだから、この説に賛成することにした。

この場合、前句の金鑿は武士である必要はなく、むしろ町人の裕福で伊達者であろう。「あつ風呂すき」に、この人の寛濶な気分が窺われる。

あつ風呂すきの宵々の月

町内の秋も更行明やしき

(現代語訳) あつ風呂好きで、毎宵ごとに入るののであるが、町内には明屋敷があって、秋もふけゆく折から、一しおの哀れを感じる。

(付心) 時節の付けであり、其場の付けでもある。「宵々の月」にはしみじみとした寂しさがある。それが「秋も更行」に移っている。移り(うつり)。違付け(説明は後出)。

(転じ) 遣句(人情なしの句)を出して、人事句のねばりを取る。活気ある気分から寂漠の気分に移す。

(補説) この風呂も銭湯あるいは遊里の風呂と解すべきで

凡兆

去来

あろうか。あつ風呂に遊び人・伊達者の感じが残ることは事実であるが、この場合は、その点をあまり強調しない方がよいのであって、むしろ、自宅の湯殿から見た景色と解した方が、付句の気分とよく合うような気がする。この作品は京都で作られたのであるが、当時の上方は江戸にくらべて、湯殿をもっている家が多く、従って銭湯に行く人はすくなかったと言われている。そして、細かいことを言えば、この風呂は蒸風呂ではなくて、水風呂で湯をわかして入る温浴であるような気がする。もともと風呂というのは閉めきって蒸気をもらさぬ構造である。これに対して、水風呂は浴槽に焚口をくつつけたいわゆる五右衛門風呂の類であるから、簡単なものであり、たとえば同じ「猿蓑」の「鶯の羽も」の巻に、

湯殿は竹の簀子わびしき

茴香の実を吹落す夕嵐

芭蕉

去来

とあるのに、情景・気分ともに極めて似通っている。この湯殿はもちろん温浴に用いるもので、その湯殿から眺めたものが、一つには明やしきであり、一つは茴香の夕嵐であったというわけであろう。



あつ風呂に入つて爽かな気分の男と、その窓外の明き屋敷、空地のままに放置されて、雑草が生い茂り、月が照らすまよになつて寂寥の気分、これはまるで反対のものを付けて、しかも、大きな調和、複雑な人間社会の運命、それに對する観想を描き出した、いわゆる違付けの方法であらう。

しかも、この付合は類似の音の反覆をうけて、各々、頭韻をふみ、相照応している。

あつ風呂ずき(ずき)の宵々の月(つき)

町内の秋(あき)も更(行)明(あき)やしき

町内の秋も更(行)明(あき)やしき

何を見るにも露ばかり也

(現代語訳) 秋もふけ行くころ、町内の明屋敷には、どこも生い茂る雑草に露が繁くおき渡しているのを見ると、涙の種ならぬはない。

(付心) 観相の付け(栄枯常ない世相を観じたもの)。前句に漂う哀愁の気をうけて、はかないものの象徴としての露を付けた。句いの付け。「二弟準繩」(安永二年刊)の付合十五条のうち、寂の例証として、この付合を挙げ、「伝日、前句の明屋敷を見れば露ばかりなりと、只寂にて付る。是らもはなやかなる句の続きたるをしづむる付方と知るべし」とある。さらに次は花の句なるを考えて、秋から春への季移りを容易にする為に、露を出した遣句(補説)

(転じ) 打越「あつ風呂ずき」の、寛潤な気分とは対蹠的

である。打越の他の句をここでは自の句に転じている。

(補説) 花前に露を出すことは季移りの一つの方法であった。裏の八句目あたりは月の定座である。この月を秋で出した場合、九句目・十句目は当然秋であり、十一句目は花(春)となり、季移りをしなればならぬ。この際、露が一番よく利用された。

何を見るにも露ばかり也

花とちる身は西念が衣着て

野水  
芭蕉

(現代語訳) 花のように散る無常の身を観じて剃髪し、西念坊となつて、墨染めの衣を身にまとう事になつたが、まことに一切有為のこの世は如露亦如電である。

(付心) その人の付け。観想の付け。前句の無常感をそのまま付けている。花にあこがれ、願はくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ、と歌つた西行法師の俳付でもある。「草々の露を発心と見るは趣向にて、西念の名に姿をつけ、散る花の無常に一句をしづめたらん。爰を句作の手づまとするべし。爰をもて我家には趣向を定むる法ありて、それを執中の法とはいへり」(支考編俳諧古今抄)

(転じ) 打越は場の句、この句は人情他の句であるが、一句の淋しい気分は変化していない。

(補説) 西念というのは、西方浄土を念ずる意で、たとえば馬士に六蔵、丁稚に久三、鍛冶の徒弟が二蔵という類の、江戸時代、念仏僧の通名。

花とちる身は西念さいねんが衣着て

木曾の酢荳すくまに春もくれつ、

芭蕉  
凡兆

(現代語訳) 無常を觀じて出家した今、木曾の山中での食味は酢荳であつたが、そのたべごろも今は過ぎ、春も昏れようとしている。

(付心) 其場の付けでもあり、時節の付けでもある。また、木曾にかくれた隱遁者のわびしい生活と述懐は、ここに住んで「おもひたつ木曾の麻衣あさくのみ染めてやむべき袖の色かは」と詠んだ、兼好法師の佛付とも見られよう。

また、西念の衣に木曾の酢荳はいかにもふさわしい食味で、いわゆる位付けとなつており、さらに前句の「花と散る身」と付句の「春もくれつ、」は無常感に惜春の情が微妙にからみ合つて、一種の匂付である。

(転じ) 大打越あたりから続いている淋しい気分からは転じていないが、この句には、木曾という地名、酢荳という食味など、変わった珍しいものが出てくるので、その辺にやや軽くなり変化が見られる。

(補説) 酢荳についての説明は、「芭蕉俳諧研究」に出てゐる小宮豊隆氏の報告が一番くわしい。要点は左の通りである。

木曾(木曾の内でも酢荳は奈良井蘆原の方では余りつくない。本場といえば恐らく福島を中心として御嶽山麓地方が本場なのだろうという)では矢張是を今日でもスンキと言つてゐるのだそうである。秋十一月の中旬から下旬にかけての時分、漬菜又は大根菜を、そのまま或は刻んで、

ざつと湯を通し、それを塩気のない(酢荳はひどく塩気を嫌ふものだから)桶に入れ、その上にスンキの素すを入れて桶を密閉して置けば、二三日するともうその菜が醃酵して、驚甲色を帯びた酢荳になつてゐるのだそうである。この酢荳を喰う期間であるが、木曾で酢荳が最もうまいとされる期間は、正月頃から寒の明けの時分までだとされてゐるのだそうである。三月の終あたりから四月頃の暖かい季節になると、酢荳桶の中に白いものが出来、酢荳がねばねばして味が甚だ良くなる。それで皆喰わなくなる。それから酢荳の喰い方であるが、是を木曾では、最も多く蕎麦のしただじに入れて喰うのだそうである。スンキそばという名前さえ出来てゐる位だという。もつとも外に、味噌汁の中へも入れれば、そのまま漬物と同じ様に醬油をかけても喰う。元來酢荳の味は、少し酸味があつて、軽い落ついた味で、馴れば馴れるほど、うまくてたまらないそうである。

木曾の酢荳に春もくれつ、  
かへるやら山陰ふ四十しよから

凡兆  
野水

(現代語訳) 山陰を伝つて四十雀の群が飛んで行くのは、古巣に帰るのであろうか。その鳥を見るにつけても、自分は木曾路に止まつて酢荳に今年の春も送ることであるよ。

(付心) 其場の付け。木曾に対して山陰、酢荳の野趣に対して四十雀も位よく、うつりがよい。また、「春もくれつ」という晩春のはかなげな余情に、「帰るやら」と応じたのも「やら」の字に、それを眺めている者の様子・心境

もそのままにじみ出て、よい付味である。

(転じ) 打越は道心者を描いているが、この句は、たまたま木曾路に淹留した旅人の望郷の感懐である。淋しい物悲しい気分は転じていけないけれども、その質はやや変化している。

(補説) 「山陰伝ふ」という何かひそやかな語気は、実際山が四方に迫っている木曾の峡谷にびったりであるとともに、貧しい「木曾の酢茎」が漂わせる佻しさと呼応して、一句の余情をさらに高めている。四十雀は留鳥であるが、冬里に下りていた小鳥が、春になって山に帰って行く。春の季語「鳥帰る」。

かへるやら山陰伝ふ四十から  
柴さす家のむねをからげる

野水  
去来

(現代語訳) 柴をさした家の棟をからげて修理していると、四十雀が山陰を伝って飛んで行くのは古巣に帰るのであるうか。

(付心) 起情の句であり、其人の付けでもある。

(転じ) 打越は淋しい・暗い気分であるが、この家の修理は、おそらく祭事に関係したもので、村人が大勢で行なっていると思われる。気分が漸く活気づいたものになって来た。

(補説) 従来の説では、たとえば麦水の「屋の漏に必ず柴をさす。里家の体」となっており、粗末な山家の家の修繕の体としたものが多かった。しかし、これではいつまでも

木曾の山中から気分が抜けられない。

もともと、しばさし(柴挿)というのは、祭に先立つ物忌みのとき、その印として柴をさし立てることを言うのであって、単に屋根の破れを柴で修理するのではない。「日本民俗事典」によれば、柴挿し——祭の忌に入るしに柴をさしたて、また祭場の境を示すために柴をさし立てることをいふ。神挿しも同様である。頭屋神事の柴挿しは、祭場の中心にさすもので、祭場と祭りの象徴の意味があり、柴は神の依り代とも考えられる。柴を挿した中は必ずしも聖なる神域というだけではなく、死霊・悪霊のようなものを含めて、柴の垣で囲う必要があったのであろう。

山に野宿するとき周囲に青い柴をさし回すのも、山の神の神域を侵さないだけでなく、山の神の崇りなどから身を守る意味もあろう。

たとえば、黒川能を行なう頭家には、当屋花というものが、屋根に挿されているが、これはその名残であろう。

### 歳旦三つ物の作り方

- ① 発句・脇・第三の形式はそのまま守ること。
- ② 表六句の禁忌は解除し、三句の中により広い世界を取り入れること。
- ③ 新春を祝うめでたい気分であること。
- ④ 来年の御題は「波Ⅱなみ・は」。

# 第十四回 俳諧芭蕉忌

第四十七回 猫蓑会

平成五年十月二十日  
於 江東芭蕉記念館

恒例の芭蕉忌を十月二十日（水）深川芭蕉記念館で修し、正式俳諧を興行した。その後、二十韻十一巻を首尾。参加者五十七名

第一部 正式俳諧興行 「冬籠り」 一卷

第二部 二十韻 十一巻

(一) 役割

宗匠	脇宗匠	副宗匠	執筆	知司	副知司	座配	座見	花司	香元	配硯	同亀	老長
中川	豊田	今宮	佛淵	権藤	佐藤	峯田	杉内	秋元	海野	中川	井典	杉江
哲	好敏	水壺	健悟	和弥	良弥	政志	徒司	和彦	海砂	凡	明	亭

(二) 次第

一	席改め
二	席入り
三	配硯
四	献花
五	執筆呼び出し
六	文台捌き
七	俳諧興行
八	花前
九	献香
十	花の匂披露
十一	端作り
十二	吟声
十三	文台返し
十四	作品奉納
十五	納硯
十六	挨拶
十七	退席

脇起り二十韻 冬籠り

捌・中川 哲

冬籠りまた寄りそはんこの柱

鶯の声がせかず炬開

公園にキャッチボールの子ら群れて

飴の袋が枝にかかれる

野分雲薄れて清き月の影

水夫爽やかにベニス恋歌

蟻螂に似た彼の目にしびれたり

党首五人が入る内閣

幻の酒二合半で陶然と

胃心肝膵腎検査パス

女性陣これみよがしに夏祭

風鈴の下将棋さす人

セクハラと良き夫演ずうちのパパ

抱いて寝かせぬ夜もありけり

凍てし道月に振りむくのっぺらぼう

お茶ばかりして過ぎし一生

老僧の夢は船旅汽車の旅

仔猫の名前やと決まりぬ

花万朶訪ふひとの高調子

春の匂ひの満つる前庭

翁

明雅

杉亭

徒司

良弥

和弥

水壺

和彦

好敏

政志

凡

央子

淑代

典明

かりん

蓉子

恵美子

碧

哲

執筆

猫薙派の正式俳諧、昭和六十一年から毎年興行して来て、そのイメージも大分変化して来た。式の花形である執筆も、はじめは中川さん・豊田さんと男性であったのが、第三回の秋元さんの登場以来、すべて女性に占有されて、式田さん、副島さん、内田さんと華麗な文台捌きが続き、中で一回福井隆秀さんの奮起によって、失地を恢復したことはあったが、うかうかしていたその中に、宗匠、脇宗匠そして、花司、香元はもちろん知司、副知司、座見、座配もすべて女性に占拠されてしまった。配硯は初めから女性にお願いして来ただけに、昨年など、すべての役は女性のものとなり、男性は徒らに身の不遇をかこつのみの存在となっていたのである。

もちろん、昔と違って男女同権の時代、俳諧は相撲と違って、あなたがち女性を拒むものではないから、女性による女性の正式俳諧はそれなりに結構で、花やかであり、優雅であり、楚々として魅力のあるもので猫薙の正式俳諧の最大の魅力となったのであるけれども、それも度重なれば飽きられもしようというものである。

いつか野郎どもばかりの正式俳諧を試みて、繊細のかわりに素朴、優雅のかわりに荘重な、いかにもどっしりとした式を行なってみたいと私はかねがね考え、適材を適所に苦心惨胆、作り上げたのが、今年の正式俳諧役割表なのである。心ある人には分かっていたらと思うが、私はプロ球団の監督稼業の辛さと楽しさを、味わえたように思う。

(雅)





桃青忌

翁忌

時雨忌

下鉢清子捌

須田智恵捌

高瀬美保捌

うち晴れて鷗の機嫌桃青忌

清子

翁忌の草踏みて行く那須野かな

智恵

時雨忌や地図をひろげる旅心

美保

息しろじろと棧橋の水夫

蓉子

遠き沼よりにほどりの声

久美子

窓に動かぬ枯れし蠅螂

淳子

手捻りの窯出しの皿飾るらん

恵美子

拭きこみし厨にシチュー匂ふらん

路子

山村に巡回映画めぐり来て

凡

リモンでばんチャンネルを変へ

弘子

棋譜を見ながら石を並べる

良弥

肩の鞆でポケベルが鳴る

志げ子

月に酒ひとり笑ひをはばからず

海砂

月渡り自販機を押す街の角

啓子

月の出にふと黙りこむ立話

水壺

馬肥ゆる候妻肥ゆる候

恵

冬待つ用意嬰のためよと

正江

何処に居たのさみのこづちつけ

淳

稲架の香をまどひしままに抱かれて

弘

初恋の人ともデート美術展

啓

葡萄酒のごとく醸され夢心地

凡

ポアロが見ぬかくされた罫

砂

うなじのはくろ何か云ひたげ

久

ピカソ・マチスを超ゆる迷作

壺

何時実施所得減税棚上げか

蓉

獄中で禁断症状ひたかくし

江

バランスをとれば選挙区小となり

志

えびのせんべいまたもおやつに

弘

雲がどどん飛んで行くなり

久

鳩を翔たせる一陣の風

淳

草野球パパが飛ばしたホームラン

恵

馬乳酒を酌みかはしめる村のもの

江

口の辺を片手ぬぐひに岩清水

壺

浮き名嬉しき月の羅

蓉

老いて大志を抱く伯父上

弥

蟹のやせると食はぬ月の夜

志

背信の恋を嘆けば明け易き

砂

銭献は銭困なりとゼネコンが

路

三毛猫を抱きかゝる母も老い給ふ

淳

頭痛腹痛襖お籠り

弘

闇から闇へ走る短夜

啓

キスのはずみに落ちしへそくり

壺

山里は忽ちダムと高速路

清

夏の月髪を啜へて釘を打ち

江

こぶ付きじゃこら辺りが決め時か

志

東京の児に送る小包

弘

見ない振りしてとぼけ去り行く

久

着られぬ服を積みあげる棚

凡

十年越し英訳源氏物語

蓉

グヴィンチの夢のあまたは叶へられ

弥

チャールストン神経痛の腰のぼし

壺

亀やみみずが鳴くはずはなし

砂

デイズニールンドけふも満員

同

エープリルフルだまされたふり

志

桜守新種の花を大切に

恵

見上ぐれば花ふりこぼす山桜

路

江戸っ子の啖阿とびかふ花吹雪

凡

啜へたばこで長閑なる昼

砂

春の調べをかなづ横笛

啓

意気揚々と帰る勝風

淳



時雨忌

橋 文字 捌

百武冬乃 捌

ますらをぶり

配硯を勤めて 中川 凡

時雨忌や吟声清し翁堂

文字

吟声のますらをぶりをや桃青忌

冬乃

終こぼる築山の陰

よしえ

目にも清しき白足袋の色

政志

この頃は猫と散歩の習ひにて

健悟

碑に雀遊べるさまを見て

壽子

ハンディカメラ使ひ慣れたり

麻子

ペダルも軽くめぐる湖

央子

ゴンドラのためたひやまず弦の月

良子

月今宵薫出しの庭賑やかに

郁子

黒葡萄など口移しする

麻

新米おにぎり彼と分け合ふ

志

子も夫も無いと信じて色鳥に

悟

告白しようかぼろりへひりむし

央

何処に捨てても危険なるもの

麻

エリツイン去れば核が捨てられ

壽

国会の攻守替はれば珍問答

良

神経症鍼・漢方に神だのみ

郁

焼きおむすびを丸と三角

え

多面体なる歴史噛って

壽

出金機回線故障人溢れ

悟

デュラダしてゲームソフト屋開業す

志

砂に月蠍が恐い上総掘り

え

遠雷の残る月しろ

央

女泣かせの指の撓へる

悟

山峡の温泉に猿も上機嫌

郁

心中を知らぬ世代はサーキット

麻

誰にもわかる唯でない仲

同

アップテンポで流すCD

良

六道へまっさかさまに連れこまれ

壽

凡愚なり吉兆の夢持みとす

文

ぜんまい時計ひとつ打ちけり

乃

魚水にのぼる名匠の浮標

え

端ぎれをつづりて縫へり袋もの

央

花の冷え地酒抱へし友来る

悟

乗っ込鮒を釣りにゆく人

郁

いとこのびやかにメーデーの列

良

はらからと酒汲み交し仰ぐ花

志

陽炎立つも夢の中なる

良

央

平成五年錦秋の候、夢のW杯出場をめざし獅子奮迅の活躍をみせた日本サッカーのイレブン！それとは何の関係もなく、東京深川にも勢揃いしたイレブンがございました。カズもラモスもないけれど、こちらのイレブンは、芭蕉忌奉納正式俳諧を行う男ばかりの十二人。二人合わせて一人前の配硯の私達が足の痺れを気にしながらも末席に加わっての猫蓑イレブンは、**●**の手打式か何かと見紛うばかりに、一同紋付き羽織袴の出で立ちにて登場です。馬子にも衣裳、ヨチヨチ歩き配硯としては、トチらぬよう相勤めるのが精一杯。しかし、文台を自在に扱い、歌膝にて句を待つ姿も凛々しき執筆の健悟さんを初め、各役の堂々とした所作は、八年間毎年興行を行ってきた猫蓑会の伝統的な型すら感じられ、まさに様式と配役の妙で見せる歌舞伎の一幕を見るが如しでありました。誰が言ったか、猫蓑一座顔見世興行「伊達競時雨俳諧」サポーターのおお様達？も、句を付けるのを忘れて見とれていたとの評判でございます。

# 馬 追

付勝練習二十韻  
東 明 雅

切締句  
日 20 月 1

ふるさとや馬追鳴ける風の中

撫子残る月代の道

秋深し篆書一幅書上げて

ゴルフのクラブ磨く縁先

向ひ家の大戸を開き婚の使者

付

治定 黙しがちなる娘の髪を結ふ

佳作1 釣合ひとれし幼な友達

同 2 鯉節ばかりもたす嫁入

同 3 KDDが愛をはぐくみ

同 4 そっとおさへる成の腹帯

同 5 身一の輿金髪の美女

同 6 太り気味だと友をいつはり

同 7 読み返しる恋の文束

同 8 神童の果実は「冬彦」

同 9 家老の息女はおもてむきなり

同 10 おすべらかしがお望みの彼

同 11 動悸鎮めに犬を抱く娘

同 12 紋付袴近づいて来る

同 13 舞台の袖に抱かれしまま

秋桜子

達子

よしえ

遊

和 弥

文 子

遊

紀 子

研 三

妙 子

良 弥

美 子

和 弥

千 雪

鋭太郎

雅 代

よしえ

※る可能性があると思うが、このままでは、人情自の句であらう。それでは打越と差合うのである。

5、これもおもしろい題材である。ただ、「身一の輿」とは、「身ひとつで玉の輿に乗る」という意味でしょうか。

6、これは4と同じく、花嫁候補がお腹が大きくなったのを、友人に見とがめられ、あわてて弁解している所でしょうか。これなら他又は自他半の句となります。

7、これも誰が、どうして恋文を読み返しているのかわからない。

8、結婚の相手であるお婿さんの人柄を述べたもの。「冬彦はテレビドラマの中のマザコンの男のこと、但し冬という季節にかかわりができますでしょうか。」という御質問でしたが、冬彦をすぐに冬の季語とするのは反対です。

9、「前句が時代がかかっていますので、江戸へ場を変えしました。家老の息女というふれこみながら、実は養女だと俳味です。恋にこの付けはいけないでしょうか。」という御質問でした。いけないどころか、仰せの通り、前句の位を見定めての付けはあつぱれです。しかし、ここで家老を出せば、次の作者が何か苦労するような気がするのです。

10、9と同じく、前句の位をよく見定めての付けです。この方が具体性があつておもしろいと思います。

11、使者を迎えての娘の様子がよく描かれてよい付けでした。

12、使者の描写ですが、やや、恋の意が薄いですね。

13、前句を劇中のものと見て付けるのは、あまり好ましく

同 14 遠き電話に聞耳をたて

同 15 華清浴池にはらとうすぎぬ

同 16 癒すすべなし失恋の傷

同 17 どんな時にもしゃしゃり出る奴

同 18 思ひもかけぬ若き媒人

同 19 羞ぢらひし娘の揺らぐ黒髪

同 20 美声容貌そればかりに

前句は恋の句であるから、恋の句は二句続けるといふ原則に従って、付句も恋の句でなければならぬ。

治定の句、お向いの家に婚禮の使者が来た。それを見ている別の家の母娘の様子を述べている。自他半の向い付である。よろこびに満ちているであろう向い家に対して、何か取り残されたような淋しさを感じている娘と、その娘をさり気なくいたわっている母親の様子が描かれている。一つの事実をめぐって、さまざまな人のさまざまな感情を写し出し、淡いがよい恋句である。

佳作1、婚の内容を述べているが、これは誰の感想であろうか、その点も曖昧であるために、一句に迫力が無い。

2、鏗節ばかりを持たせて嫁にやるのは、何処の郷の慣わしであろうか。あるいは貧しくて止むを得ぬ処置なのであるうか。どうもそのあたりがよく分らない。

3、KDDは、前句と位が違い、むしろ打越の位に合うような感じがする。これは逆で、前句と位がよく合い、打越からは転じなければならぬ。

4、この句は作り方で、すばらしくおもしろい句にな※

いことではない。何となれば、劇の中ならば、どんな非現実、超現実でも許されるからである。この付句の二人は役者でこの劇に出演するのであるうか。

14、この句も何か自の句めいているし、第一、恋の意が乏しい。

15、華清浴池は楊貴妃が玄宗皇帝に初めてまみえた時、浴を賜うた温泉で、現在も中国の西安に現存する。大戸を開けて婚の使者が来るのであるから、地方の豪家ではあるうが、楊貴妃を持ち出すのは、やや位が違うだろう。

16、この句も自の句である。  
17、仲人をかけてしゃしゃり出るのは、瓢虫ばかりではない。

18、婚の使者が大戸を開けて出て来たので、さぞかし年配のお爺さんだろうと見ていると、意外や、年若いハンサムな男性であった。見ていた女性の意表をついた事実と、それに対するおどろき、そして、心の動揺をさり気なく述べて、おもしろい句である。

19、これは求婚の相手となる娘であろう。付いているけれども、あたりまえの事をあたりまえに述べている。

20、これも求婚された理由を述べ、全くあたりまえのことを述べたまでである。

恋句はこれで二句目となり、次は恋離れの句である。ウラに入って三句目であるから、夏か冬かの季語を用いた句を出してもよい。また、打越が他であり、前句は自他半、付句は他以外なら何でもよい。

第五回全国連句新庄大会

半歌仙三卷  
二十韻二卷

平成五年九月三日(金)・四日(土)  
山形県新庄市／新庄市民プラザ

早稲の穂

秋元正江 捌

秋の句座

式田和子 捌

穂 芒

下鉢清子 捌

早稲の穂を気にしつづ入る羽州かな

秋元正江

新庄のとろり誘ふや秋の句座

式田和子

穂芒のゆらりと揺れて羽州かな

下鉢清子

台風一過仰ぐ名月

波谷盛興

水引草に彩を増す頃

名古則子

新の積まるる窯の初月

山田史子

崩れ築流れ大きくひろがりて

齊藤実

握手交して決まる商談

佐藤良弥

連衆のピアス水色爽やかに

伊藤敷彦

誕生祝ふ調べ洩れくる

荒木章

改築の家に初孫待たるらん

大川与志見

おもたせの酒格別の味

後沼栄太郎

油絵の位置たしかめる髭のひと

今井米子

鴿二羽が着くとタウン紙

門脇正

楽流れ新体操の汗が舞ふ

今川いね

極太毛糸ころがして編む

小島信子

冷々と汐に浮き出る大鳥居

ブダガヤの金剛跼座を拝しつつ

小川邦昭

白鳥の剥製かざる記念館

米

お巡りさんの案内やさしく

帽子の紐を取り換へてゐる

史

肩並べゆく万葉の道

興

議長席女性前からある如し

自慢するほどの価値ある魚拓にて

郎

挨拶をすれば上司にキスマーク

信

情に溺れて恋の告白

恋女房をやたら紹介

彦

連立政権乱れはじめし

章

失ひし乳房をかくす哀れさに

五ヶ国語堪能な妃のレセプション

清

立居振舞ままならぬ宇宙船

興

待って良くなる蒲焼の味

政治改革遅々と進まず

昭

玉の汗噴き熱きラーメン

実

山の宿燈芯つきて月涼し

雪晴れて野兎の足跡月照らし

昭

夏祭きよめお神酒の山車の綱

同

民話の鬼はおどけじょうずで

頬被りした出迎への爺

郎

S列車子らの押し寄せ

興

遠きよりトランプットの唳々と

同窓会先生生徒見分けなく

ね

寒の月我が影踏みて帰りけり

章

信号変るうらら人波

リニアモーター夢の広がる

昭

シャム猫虎猫三毛がたはむれ

米

花盛り一步一吟橋の反り

義経の辿りし径に花たづね

彦

花筏寺苑の池の静かなる

実

夢幻か群るる蝶々

つばめがのぞく島のよろづ屋

史

野立の席のあたたかきこと

信

夢幻か群るる蝶々

つばめがのぞく島のよろづ屋

史

# 早稲の出来

# 水の奥

# 第五回全国連句新庄大会

## 上月淳子 捌

## 東 郁子 捌

早稲の出来先づたづぬるや米所

上月 淳子

爽かや翁尋ねし水の奥

東 郁子

田毎に映る端正の月

杉江 杉亭

早稲の香の高き昼月

井上 達磨

初獵の逸れる犬をしづめりて

旗谷 道

冬支度机の位置を爰へもして

小林 しげと

泥に塗れたスニーカー履く

園 理恵

ガラスケースに入れる人形

芳田 龍子

公園を上り下りの待ち呆け

内田 素舟

恐竜の化石の卵競売に

杉内 徒司

予約済ませて急ぐ空港

庄司 籟山

若きふたりの旅券整ふ

影沢 与六

アラビアの煙草にも馴れ字にも馴れ

道

地球儀を廻しひろがる国會

岩田 トメ

いつものスーク蛇使ひ爺

亭

神の留守狛犬宙をにらみをり

磨

藍ののれんの静かなる丈

道

心で漣けよ紙漣のこつ

磨

法城を陰で支へる梵妻さん

帝

滑り台生徒五人の分教場

磨

角袖を着てくぐる格子戸

道

瀬戸内の島大漁に湧き

龍

ふっと目を開けて時計を取り上げる

道

口移し度を越す「富貴」純米酒

司

直線裁ちを半日で縫ひ

恵

嘘をつくのがうまい羅

と

寒の月車きしきし夜の道

山

月青き名刹仏法僧の鳴く

司

鱈鍋煮えて友と一献

舟

腰の痛みの方に気になり

龍

同窓会病氣安否がまっさきに

亭

年寄は使ひこなせぬGコード

六

散歩の土堤を撫でる春風

舟

風のまにまに初蝶の舞ふ

磨

花会式天狗面出て驚かし

恵

見はるかす一目千本花がすみ

と

山の麓に聞ける囀り

山

皿に盛りたる草餅の彩

龍

九月三日(金)・四日(土)の両日、同

市プラザ市民ホールで開催された。まず、

三日午後一時から、前俳人協合理事長草間

時彦氏の基調講演「俳句と連句のころ」

には、同氏の連句に対する深い洞察が語ら

れ、感銘が深かった。

続いて、開会式、暮吟の表彰、選者の講

評と形通りに進行したが、今回は特に、こ

れまで五回皆出席の人に対する表彰が行な

われた。省みれば平成元年、「おくのほそ

道」三百年を記念して、全国に先がけてた

だ一ヶ所、連句大会を開催されて以来、而

後五年も宮々と続け、連句復興の気運をひ

らいて来られた新庄市、ならびに笹白舟氏

その他関係の方々の努力に対してこそ全連

句人は感謝すべきではなからうか。

終って、六時から国民年金健康保養セン

ター「もがみ」での懇親会。翌四日は九時

半から実作連句興行。そのあとの最上川船

下りは折からの台風のため中止されたが、

和氣謁々、大成功裡に散会となった。

(雅)

## 芦丈翁俳諧聞書(IX)

自然を詠め、誠をよめとこういう事です。それで言ってみれば「あり得るものはつく、あり得ないものはつかない」と、例の「笈の小文」の冒頭にあるです。蕉風というのはそういうもので、それで前にも書いてあげたけれども「杉戸あくれば匂ふ梅が香」という前句に、貞徳流では「鶯の歌の友達たづねきて」と、梅に鶯と、まあそういう風で、その次の談林はどうだと云ったら、「春の夜の闇はあやなし手水鉢」と、「わがせこが来べき宵なり頭痛持ち」というような、あれは衣通王の歌だね、「わがせこが来べき宵なりさがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」のもじりだね。談林は時期が短いからそんなこともまあ出来たが、それ永くやって行くには、やはり自然でなけりゃ種つきちまうだ。芭蕉の発見したものは、自然に従って自然を詠んでゆくでなけりゃだめだと、それはアノ狂句木枯の巻の何だだ。髪はやす間のね、あの前後の付け筋と、この人とこの人はちがっている。この人とこの人は同じだという、そ

の運び具合をね、よく会得するということが、まずもって一番大切だ。H成程、それでしようね。Nそれをお風呂の中でガアガア言ってるね、Hいやそんなもんじゃありませんよ、Nそういう、そうだって、何か講義録ちうだ。醒雪の、Hいや、僕はこう思うんですよ、連句の芸術性というのは、連句のあの形式でなければ詠めない、あるいは発見できない詩ですね、その詩をもちこむ、たとえば和歌なら和歌でとらえられる詩情というものがありますね、俳句は俳句でというか、発句は発句で、川柳は川柳でとらえられる詩の領域がある。しかし、この連句でなければとらえられぬ詩情、これは何か、それは雅と俳(滑稽)の微妙にミックスされたものの中にあるのではないか。そう思って、「冬の日」や「猿蓑」あるいは「炭俵」を読んでみますと、なるほど、芭蕉はうまくそれをとらえた、というところが多いんですがね。Nそれでね、伊良湖崎見に、豊橋の連中と五人ばかりで行って、それから亀山という所の校長の浜田先生がよってくれるというでね、浜田先生のうちへ寄って、それから亀山の学校へ行ってね、それからまあ、発句の話したり

したその中に一人の先生がね、連句の付合非文学というのに対しては、どんなお考えだかと、こういう、それからいろいろ話して、そのあけの日には、何だ、学校へ泊ってね、女の先生たちが、お鮎やおむすびこしらえてね、お弁当こさえて、先生たちも三人ばか、それからその小使さんにおひつしよわせて、行った所が、伊良湖崎のあの村は皆おひつこししちやって、からっぽになって、Hハハハ戦時中ですね、N戦時中、大砲の弾丸の性能をためすために、伊良湖崎の海のはなっこの所に、大きなコンクリでね、たまのあたるところをこしらえて、それがためにまあ、一切のもの、皆宮山の影へ、お宮でもお寺でも学校でも役場でもね、皆移しちまって、広い野原になって、その「鷹一つ見つけてうれし伊良湖崎」の碑がね、大きな岩の上にあって、それをあすこの司令官がね、脇へ移して、それから戦争が済むとまた、元の位置へ直してくれたという、その何とか言う中將だというのがね、マア、いい事をしてくれた、疵も付けないように兵隊たちにやらせつらけど、それから、そこで何だ、その岩の上でね、お弁当ひらいて、そしたらそこがちょうど、

まあ、連句の説明に都合のいい所だもんだで、そのまあ、よんべの話じゃお分りにならないか知らんが、ちうわけで、それで発句はそりや大きな松ね、二人で抱きついてみて二抱えあるだ、こんな大きなのがずーっと浜辺だから、高くなって枝がその岩の上にして、岩がまあ農家のかなり大きな土蔵を横にねかしたようなもので、その上が平らで、碑があつて、それからその続きが芝や雑草が生えてね、その上に坐つてまあ弁当ひらいて、それで、例えてみれば、発句はこの松だと、どちから見てもよい松で、それにこの大きな岩、ここへそえりゃ又一そうよくなつてくると、これが脇の役をしていると、それで絵に書いても写真に撮つても、松ばかり撮り、岩ばかり撮つたじゃ、いくらいい松でも、いくらいい岩でも、おもしろくねえ、このそばへこうした大きな岩、そしてその上へ枝をはつている松、両々相俟つてとてもいい風景ができてくると、発句と脇の關係はこういうもので、それから第三はどうだといつたら、青々としている海の方から薫風がおもむるに今来ていると、これが第三だと、それで、岩と松といくら一緒に書いても、松の根が岩に

もならんし、岩がそれじゃ松にもならない。岩は岩、松は松、別のもので、薫風というものゝ海の方から吹いて来るのも別に理屈じゃないと、それから、四句目はどうだと言つたら、ここで御同様、弁当を使つている。これが四句目になる。それから五句目の月はこの神山といふだね、宮山といふ山があつて、それは何だだ、伊勢の大御宮様へ面したところは千古斧鉞の入らない古い林がね、ずつと一面に、この山の上へ月が上つてくると、それから折端はどうだと言つたら、この山で何か珍しい幽禽が鳴くと、こういう風に運んで変化してゆくけれども、その間に、匂いとか移りとかいうその付け進んで行く味わいがそこに生まれてくると、これが芭蕉の連句だと、そでこういう風にはこぶものは非文学だと、それじゃ松は松、岩は岩と別々に詠めば発句で文学で、これをそばへ並ぶればそれは非文学だと、それは子規が言ったことだから、皆アア連句、あれは非文学だと言つていた方がえらい気が利いたようで、新しいと、そう思いちがえていると、けど芭蕉の連句はそういうもんじゃねえちうわけでね、その事言つてはなした事があつたけど、その

通りですだ、ほでマア芭蕉の心法という何だだ、手紙をね晩山の所へやつた手紙が芭蕉の書簡集の中には無論ある。短い手紙だけどね、連句をやる者は沢山あるが心法を知つてやるものは寔にすくないと、こいうね、遺憾であるちう、そいう手紙だね。  
註 二白、俳諧御執心之由、先は珍重、物しりにならんより心の俳諧肝要に御座候。句者は沢山御座候得共、心法を守る人ハまれまれなるものにて候。

一、季よせの御不審御尤に候。愚老は此事にうとく候儘、考へ跡より可申入一候。増山井御用可然候。はせを  
十七日

晩山様

(校本芭蕉全集 第五卷 三〇八頁)

H その心法というのと、先程の付方十七体ですかね、先生からいただいたのには付方十五体になってますね、それから付方二十三体というのもあるし、それからマア八方自他伝もこの類でしょうか。N 其角や何か何したのものにもそいうのがあつたね。いろいろあるだ、それでマアそつたものも、ただ笑つてなんで、やつぱり研究

した方がいと思うのは、七名八体、あれも支考かな、あの几童はそれを用いてね、「手びき蔓」というね、短いもんだけど、それは読むべきものでね。それはいいだ、几童の「手びき蔓」H先生は何ですか、やっぱり七部集の中では「猿蓑」あたりが一番お好きでいらっしやいますか。Nやっぱ何だね「冬の日」だね。Hあ「冬の日」がよろしいんですか。N「冬の日」だ。「冬の日」は何故てやね。付け運びも句柄もいいしね。あれは何だだ、貞徳以来のね、やがましい制約を蹴飛ばしてるだ、「俳諧に古人なし」というはそれだだねウソ。H先生、それじゃ「冬の日」の最初の一卷だけですね、いろいろ疑問に思うことをおたずねしながら、一卷をお教えいただけませんかでしょうか。Nエエ、H最初の巻の発句ですが、これは、「狂句がらしの身は竹斎に似たる哉」幸田露伴先生によると、狂句がらしという句はいかにしても続かないとね、これは無理だからと言って、「これがらしの身は竹斎に似たる哉」これだけが発句だということにしておられますが、私はこれには反対で、わざわざ芭蕉はこの発句を字余りにしたところに新しみもあると思

うのですが、Nエエ、そういう類の句がいくらでもあって、それはまあ何だね、はなさなでややはり字余りで、Hそすと、これは勿論目の句です。N無論目の句、自にも目、Hそれからその次が「たそやとぼしるかさの山茶花」Nさ、そいつね、いろいろ説があるが、たそやとぼしる、濁りが打つてあるね？、エエなかったかな。Hここにはありません。たそやとはしる、N儂はたそやとはしると、こういふ、そうすると勝峯晋風の親爺様の錦風は、走るといえばちうわけで、マラソんで飛んで行くようなのだけ走るのといっちゃ、小走りにね走る、ね、かさの山茶花というのがね、さ、山茶花の花のハラハラと散る、その下を小走りに行ったとも、マア言えるが、儂から言え、初めて尋ねるところはね、向うへしれるように何だだ、山茶花の小さい花の一つ咲いている位のをね、笠の端へさしてでも来たか、と、はてな、芭蕉様ではないか、芭蕉さんでございますかと、小走りに言っていたという、その挨拶の付けと、Hウソなるほどね、N芭蕉と野水と小走りに芭蕉さんでござんすかちうわけだ、その小走りに出て出迎えた様だと、Hその風景ははっ

きりしないでも、とにかく笠に山茶花の花をさすか、かざすかしている一種の風狂の姿ですね、N風狂の姿だ、Hそりゃよく分かりますね、N常人はそんな事はしないしね、まあ、風流人かね、その位の事はする、儂共はじめての所たずねる時にゃね、駅へ行ってそれからどっちもまあ顔を知らない同士で、どやどやするところで、蝙蝠傘をちよつとこう上にあげると、そうすると相手の人が、エ芦丈さんでござんすかちうわけだ。だで、笠へね山茶花をさして、その注意をひくためにしたとすりゃ、さ、そこがまことに二句の間がしっくりしてくるだ。Hするとこれは他の句Nいや、それ自ただ。それは野水の目の句だもんだで、発句は芭蕉の目の句、脇は野水の目の句だ。Hなるほど、Nさ、それからその第三だ、第三がね、「有明の主水に酒屋つくらせて」と、するとマア野水が酒屋の主人であるかないか、それは分らないにして、酒屋の主人なんかじゃないけれど、それで、二句がまあ、そういう情景で、それからその附近で普請をしていると、大工がね、家を建てていると、それで、そうみただけで、その場はあんまり穿鑿しなでね、第三の役目を



していると、それからどの注解でも、有明の主水と続けているからして、さあ、そのいろいろの有明の主水という何々があつた、有明の主水という酒屋があつたなんてね、そういつてしまつちや駄目で、第三は第三体というのがあつて、ほだで、有明のといふのは後でかむらせたもので、別なものとして、主水に酒屋つくらせてという一句を仕立てて、それから有明のとかぶせると大山体になるだ。ただ大山体というのは、そういうところに「の」の字の入つたのは本当じゃねえけれど、どうも有明をね、有明やとも言えんし、有明にじゃまずいし、どうも有明のというより外仕様がなからして、それを上の別の事柄とすりや、主水に酒屋つくらせてと主水というような事はまあ、大工や何でも親方の事を主水という場所もあるとか、それから何だだ、酒屋とすりやね、主水というその宮中の水の係りの役人、役目をいうとすりや、酒を造るにや水というものが非常に大切なもので、それで、や、うちのおやじの杜氏はね、あれはどうも神様のようなだと、この水ならいとい言えば必ずいい酒ができるよと、ありや主水だといふ、その仇名にでもよばれている

親父だといふような、それから酒造る水はまあ、昔は山の流れ川の水をね、それで昼間日光にあたると、硬度というものが大切なのに、その硬度が分解して軟水になつちまつたんじや酒にやいけないから、酒屋じや水を汲むに何でも夜明けに汲むと、すると有明に水汲む、無論、そのね、その頭に有明のとかむせた事がやはり働いているわけだ。それをまあ、何だだ、その幸田露伴の註解か誰のだつたか、何しろ、その大工、肝煎大工が笠をきているからして、その下働きの者まで花笠をきて飛んで歩く、そんな脇にどこじやええ、芭蕉のかむつて来た笠、そんなもの、そんな所までね、もつて行つて講釈している、それ連句を知らねえから、そういうことをしている。そんな笠、そつちの方ですんでるだ。Hするとこの句は何でしようね、表の月の定座をここにくりあげたわけでしょう。Nそういうわけだ、それでそのくり上りもね、一体、前句がまあ、そんな風で、冬の立句に冬の脇で、月を引上げて来なけりやならんような場所でもねえけれど、Hそすと、これは荷兮が何か、Nそれはまあ、冬季へ有明だもんだで、秋だね、他季へ移るわけだけど、月といふ

ものは年中出ているからして、他季うつりには月が一番世話ないわけだ。Hするとこの自他の区別は自とも他とも取れるわけでしょうか。N主水に酒屋つくらせてだでね、それは他ですね、エ、他ですだ。Hそしてその次は「かしらの露をふるふ赤馬」ま、人情なしですね、Nエエ、景色をのべる叙景の句場の句、Hそうですね、さてその次が「朝鮮のはそりすゝきのにはひなき」ここで問題になるのは、朝鮮という地名が表六句の中に出ますね、これは、Nそれが大切のとこだだ、それがその貞徳や何の定めた、そんなものにや一向拘泥しねえ、芭蕉独自のものと、芭蕉以前の制約や何に殆んど眼中におかないと、取るべきは取るけれど、とる必要のねえ所は蹴飛ばしているよと、そだて、「朝鮮のはそりすゝきのにはひなき」というもんだで、朝鮮のとあるけれども、朝鮮へ行つてみたわけじゃねえ、朝鮮から持つて来たか、まあ、その細りすすきのといふやせつばなすすきといふ事で、Hするとこれも人情なしになるわけですか、Nにはひなきといふだからね、薄人情といふもんだね、Hなるほど、Nうすい人情があるよと、自とも場ともとれるね。



よなほこり新興都市に降りそそぎ

怒声罵声で知事の椅子追ふ

氣保養に振る賽の目の赤んべえ

真打ちよっととちりたる宵

雪しまくタクシーだまり灯りゐて

待ちぼけ同志そのままに聞

離れない死がお互ひを別つまで

競売となる古き恋文

碧緑の炎涼しくガレの壺

天地のさかひ虫しぐれ聴く

十六夜に杖曳き出づるふた三足

風爐名残なり僧体の客

ベストセラー伝記に少し嘘もあり

マイムでさする想像の壁

伊之助の軍配初場所限りにて

抱けばべそかく孫も可愛ゆき

だし巻きの卵きんとん花の下

遊び足らひてなほ惜しむ春

平成五年九月二十四日

於 緑華亭

遠足の小さきリユック鈴鳴らし

広野に沈む夕日赤々

不意打の地震に火災大津波

握り飯くふだまりこくって

職人の手だれの技に見とれつつ

犬も寝そべるベルシャ絨毯

冬の薔薇シュールの絵画見し疲れ

鎖骨のくぼみに熱きくちづけ

繰り返す情事の果のけだるさに

ひよいとタオルをのせて岩風呂

老松にさす満月の光濃く

つくばひの蔭すだく虫の音

羨とる里より届く秋裕

あゝ云やかう云ふ天の邪鬼なり

嫌煙権あれば喫煙権ありと

差し引きトータル合はず一生

ポトマック花びら掬ふ旅心

觀光客の憩ふ若芝

平成五年四月二十日 起首

同年 十月四日 満尾

イースターロシア正教復活し

原発の穴埋める兵士等

好きほうだい伸びる罌粟に負けもせず

獺盗む宿の灯火

息荒く乳まさぐりてくるは誰そ

肩の歯形に残る移り香

『短命』の咄一席とりをとり

満員御礼スキーバス行く

いつせいにフツサマガナでカメラ出し

入内雀ばつと飛び立つ

鈴なりの枝豆をもぎ月迎ふ

半の目ばかりつづくやや寒

美術展父は安きにつかぬまま

夢いろいろと還暦の宴

五百米掘れば湯が出るおらが村

スプリングハズカムと教室

靄ひたる空には花のシルエット

蝶の静かに生るるひととき

平成五年八月十三日

於 桃徑庵

# 新刊紹介

芭蕉と岐阜・大垣

大野 国土 著

大野氏は俳誌獅子吼・鶴同人。芭蕉と美濃とのかわり  
についての考察は現代人のあり方を示唆する。

まっお出版・一六〇〇円

膝送り百韻

處暑といふ

花の会

初折

處暑といふ道玄坂を登りけり

木槿咲きたるブロッコの花

二科展へ搬入のひと月浴びて

脱ぎし上衣に小銭ちらちら

掛時計電池いれ換へ頼む母

そしらぬ振りで欠伸する猫

棧橋にボート置き場の空きありぬ

若き牛蒡をさがきにする

風に乗る園児の声の賑やかに

数珠をはづした和尚先生

握られし手の軟らかく大きかり

エステ通ひが癖になりさう

駅前雑居ビル地下エレベーター

迷ひ込みしか穴出し蛇

事始所信表明新首相

コンピュータで春の月描く

裂織の紐の背負籠を畦に置き

胡麻いっぱい南部せんべい

正江

好敏

千雪

淑子

志げ子

達子

敏

江

淑

雪

達

志

江

敏

雪

淑

志

達

しゃべりだす外人変な関西弁

鬱から躁へ切り替はるとき

餅花の影の揺らめく青畳

炬端で聞きしきのふ見た夢

二の折

北の旅雪の空港降り立ちぬ

妖精が好きイエーツが好き

繊細な筆先皿絵彩られ

笛師の家の塵ひとつなく

許されぬ恋を貫く嬰のため

抱きとめらるる寒の戻りに

雁風呂の枝集めきし夕まぐれ

よなぼこりして還る兵卒

知命にて将棋名人射止めたり

盆栽組合上野山下

AAAで中古ジーンズ試着して

横目でにらむ禁煙の札

宵月夜建前やつと始まりぬ

爽涼の酒果つるなき宴

敏

江

淑

雪

達

志

江

敏

雪

淑

志

達

敏

江

淑

雪

達

志

邯鄲を聞きに泊まりし御嶽なる

日本武尊を祀る古塚

沢瀉屋十八番の外連にて

赤いボルシェでゴルフ三味

やあさんと共に法律まなぶ席

円高弗安つづくこのごろ

掛け香に甘き言葉で誘ふ姫

蘭鑄のごと迫りくる顔

フェミニストいざといふ時意気地なく

逆探知する電話旧式

貰ひたる元麻葉犬嗅ぎ廻り

不精してます洗濯の月

盆路を刈りて迎へし花灯籠

オリープの実の熟るる島々

三の折

フルートのトレモロひびく西洋館

落款を見て壁の絵を褒め

ほんとかな千人斬りのあの噂

おっと危ない嫂の裾

江

敏

雪

淑

達

志

敏

江

淑

雪

達

志

江

敏

雪

淑

志

達

香港の飲茶しげしげ通ひたり

救急車来て停まる路地裏

野次馬をたちまち捌く助監督

サンダル履きの下足番ゐて

夏休み子等は実家に送り込み

訪問販売買ってしまった

小名木川芭蕉稲荷の旗なびき

日永にめくる江戸の洒落本

マラソンのランナー包む臘月

雜市の立つ廃校の跡

やよ鴉畑荒らすな種掘るな

媼の語る民話訥々

陣笠の議員も混じるニュースショー

ランチメニューに珈琲が付き

洪滞の高速抜けて料金所

濡れた女がじっと佇ってる

楯明り月も斜めに肌合はせ

他人のものとする先がない愛

書き直す遺書数箇条あれこれと

釣るともなしに垂らす釣針

気象庁地震予報に洩れた鳥

パリ転勤で支店長とか

まなうらに花残りけり滝桜

遠蛙聞き心地好き床

名残の折

人麻呂忌和泉式部忌小町の忌

袋回しも今やたけなは

ポケベルが置いた鞆の中で鳴る

ベットショップはいつも覗いて

古切手集めて贈る義手義足

海賊船の鬪體帆柱

あえかにも冷たき美女を横抱き

上品味はふ初弥撒の堂

毎食にベーターカロチン纖維質

もらふチラシは丸めゴミ箱

没ばかりやつと特だね摺みたり

発掘現場鳴いてゐるけら

書割の臥待月の舞台裏

秋の扇をぼんと投げつけ

熱気球アルプス越えに挑戦す

高所恐怖に効く薬なし

清貧の暮らしと言ふにほど遠く

真向法の免許皆伝

故郷の寝覚めは友と薬家にて

古民具さがす町の道具屋

揚げ花火終は仕掛けのナイアガラ

山時鳥聞きし連衆

平成五年八月二十三日

於 洪谷むつみ会会場

敏 秋元正江  
 江 豊田好敏  
 志 小林千雪  
 達 金久保淑子  
 江 蒲原志げ子  
 敏 篠原達子

「季刊連句」に左の方々より、御芳志を  
 いただきました。有難くお礼申し上げます。

敏 一金 二万円 鎌田正憲様  
 江 一金 一万円 片山多迦夫様  
 志 一金 三万円 柏連句会様  
 達 一金 五万円 猫蓑会様  
 江 一金 一万円 ころも連句会様  
 敏 一金 一万円 竹本義人様

江 一金 一万円 斎藤孤柳様  
 志 一金 五万円 猫蓑会様  
 敏 一金 三万円 花の会様  
 雪 一金 一万円 鶴籠会様

## 連句のリズム

### 竹本義人

今、日本では連句が隆盛を極めている。

俳句、短歌は「個」の文学、つまり「孤独」の文学であるのに対し、連句は「衆」の文学、つまり「交友」の文学であるので、連衆が三人であれば三倍、五人であれば五倍の面白みがある。それだけに、俳句、短歌を一応「卒業」しないと連句に入れない感みもないではない。

隆盛を極めているのは善いが、その流れを見ていると、歳月と共にだんだん何かが欠けていく思いがある。その一つが連句に於ける「リズム」である。リズムは日本の詩歌の生命線である。

連句に於ける「リズム(調子)」は二つある。「音調」と「情調」である。連句では作法と式目にこだわる余り、このリズムがだんだん粗略にされていく傾向が濃厚である。この事を、「俳句研究」4月号所載、水野隆氏掲の「初昔」の巻から診てみよう。これは今年の一月二十四日、現代連句シンポジウム「現代詩人による公開連句実作と討論」が、東京九段下のホテル・グランド

パレスで開催された時の作品である。まず、その巻の初折の表四句は次の通りである。

初昔雅(みやび)は色を好むより

化粧はつかに水仙の空

屋上に仔猫と月と笛吹きと

地球儀回すきしみしばらく

発句で「初昔」を正月の季語として使っているのには問題があるように思えるが、とにかく、発句と脇句の付け合いは、「恋の句」の淡い呼吸がびったりと響き合っていて見事なものである。第3句もまた見事な「転じ」であるが、当地にも来られて連句の講演をされた事のある東明雅氏が、これは連句の作法に反するから「笛吹きと仔猫と月と屋上に」と直すべきであると指摘されている。これは先に述べた、リズムのうち「音調」の嫌いである。ところで私が今ここで問題にしたいのは、第4句「地球儀回すきしみしばらく」のリズムである。まずこの第4句では、地球儀と「きしみ(軋み)」を言えば、「回す」は言わずもがなの駄語であることは、俳句を少しでも心がけた人なら直ぐに気が付く欠点である。が、それよりも、この句と前句との付け合いのリズムの方が問題である。第3句と第4句

とを続けて口ずさめば、そのリズムがしっくりしていないことは誰にでも感じられよう。再び繰り返すが、日本の詩歌に於いて、リズムはその命である。

それで、第4句の付け合いは、東氏が直された第3句とあわせて、

笛吹きと仔猫と月と屋上に

地球儀きしむしばらくの闇

とする方が、音調も情調も、しっくりとして善いと思う。音調の方は口ずさめば瞭然であるが、情調については少し説明を要するかも知れない。

第4句に屋内の「闇」を注入したことによって、第3句の「月」の明るみに対する、屋内外の「情調」の「移り」が生まれてくる。また、暗闇の中で「地球儀を回す」という、不可解さというか、面白さというか、新たな詩歌の種が生まれて、次に付け合う人には好都合となるであろう。これは連句でいう「誘い」の手の面白みである。連句の面白さはこんな所にある。

竹本義人氏は、ロサンゼルス在住で工学博士。俳人でもあり、昭和六十一年以来の知人。この文章は邦字新聞「羅府新報」に掲載されたものである。(雅)

(連句会案内)

●連句教室

日 時 第一日曜日 午後一時〜五時  
江東芭蕉記念館

江東区常盤一六三

(電) 三六三一―一四四八

●柏連句会

日 時 第二日曜日 午後一時〜五時  
光ヶ丘近隣センター

(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地  
マーケット下車)

(電) 〇四七一―七五―三七四六

●A・C・C連句・理論と実作

日 時 第二・四土曜

午前十時〜十二時  
新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター

(電) 三三四四―一九四一(代表)

●猫藁会(会員制)年四回

(一)月・四月・七月・十月 第三水曜日  
江東芭蕉記念館

江東区常盤一六三

(電) 三六三一―一四四八

雁 帛 往 来

▽九月三日・四日、新庄市の第五回全国連句大会へ出席。

▽九月五日、深川芭蕉記念館の連句教室。

▽九月十一日、A・C・C出席、式田さん式目論。秋元さんは発句の実作指導。

▽九月十二日、柏連句会 会者十四名。

▽九月十四日、ヴァチカン大使荒木忠男さんを客に一座、半歌仙を作る。

▽九月十六日、電通連句部、出席七名。

▽九月十九日、柏光ヶ丘近隣センターで正式俳諧の總稽古、今年は役員全部男性で、

これまた見事であった。

▽九月二十二日、名古屋熱田神宮で式田さん指導の正式俳諧興行。私は正式俳諧の歴史を話し、また老長として式に参加、大成功であった。

▽九月二十五日、A・C・C前期講義終了。

▽十月三日、深川芭蕉記念館の連句教室、出席二十名。三卓に分け興行。

▽十月九日、A・C・C、新学期始まり、四十九名という定員オーバーにて出発。

▽十月十日より十六日、妻・長女と印度旅行。

▽十月二十日、深川芭蕉記念館で時雨忌正式俳諧興行、同時に猫藁会、十一卓に分れて二十韻興行。男性だけの正式俳諧見事に出来てうれし。

▽十月二十一日、電通連句部、出席八名。

▽十月二十三日、A・C・C、教室空席なく、活気ありて楽し。後、鶴の会。

▽十月三十日・三十一日、矢崎藍さん主催の「とよた連句恋々まつり」に参加、基調講演をした。

季刊「連句」第四十三号  
平成五年十二月一日発行

編集人 東 明 雅  
発行人 東 明 雅

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二 東方  
電話 〇四七一(七五)二九二

振替口座 東京七一五二二三三

印刷所 株式会社 岩田印刷

▽277 千葉県柏市酒井根六二六一

電話 〇四七一(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共

一年 二〇〇〇円 送共

電話 〇四七一(七四)〇一八三

印刷所 株式会社 岩田印刷

▽277 千葉県柏市酒井根六二六一

電話 〇四七一(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共

一年 二〇〇〇円 送共

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に  
必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使え  
る本邦初の連句辞典

版  
B6判  
三五二頁  
三五〇〇円

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

## 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
思ひなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木  
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円  
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円  
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円  
季語辞典

日本の季節にまつわる言葉をストック・不快指数などを収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円  
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一九〇〇円  
国語学会編

国語慣用句大辞典 B5 六二〇〇円  
白石大二編

国語慣用句辞典 A5 六二〇〇円  
白石大二編

国語史辞典 B6 三三〇〇円  
林巨樹他編

日本語 語源辞典 B6 一八〇〇円  
堀井令以知編

京都語辞典 B6 一七〇〇円  
井之口・堀井編

擬音語擬態語辞典 B6 三三〇〇円  
天沼 寧編

隠語辞典 B6 一八〇〇円  
堀井 実美編

近世上方語辞典 A5 一五〇〇円  
前田 勇編

花柳風俗語辞典 B6 三三〇〇円  
藤井宗哲編

明治新語俗語辞典 B6 二八〇〇円  
榊島忠夫他編

難訓辞典 B5 三三〇〇円  
中山泰昌編

名乗辞典 B6 二八〇〇円  
荒木良道編

名数数詞辞典 B6 二八〇〇円  
森 謙彦編

あいさつ語辞典 B6 一七〇〇円  
奥山益朗編

新版 こぼ遊び辞典 B6 五八〇〇円  
鈴木業三編

類語辞典 B6 二八〇〇円  
鈴木・広田編

類義語辞典 B6 二八〇〇円  
徳川・宮島編

表現類語辞典 B6 四八〇〇円  
藤原亨一他編

新版 文章表現辞典 B6 二九〇〇円  
神島・村松編

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-3233-3741~2